に書いた。明治二十九年三月から明治三十三年七月までの何年かが留学期間であろう。

秀世が雑誌に発表した論文で管見の限りのタイトルを拾うと、

・「アデイソン氏病ノ一例（承前）」（「中外医事新報」三六四号一八九五年五月）
・「失語症」（「神経学雑誌」一九〇二年六月）
・「失語症ニ就キテ」（「神経学雑誌」一九〇二年八月）
・「脊髄病」（「神経学雑誌」一九〇二年十二月）。

等がある。秀世の専門分野はわたしには判断できない。

2　『かなのしをり』

百合子の書の師範としての業績は『かなのしをり』に象徴される。本書は書の手本帳として、百合子の作品の影印を集めたものと推測され、信綱の尽力によってほぼ出版というところまで漕ぎつけていた。信綱は才能ある人たちへの助力を惜しまなかったから、百合子の力量を推測することができる。

石榑千亦（いしくれちまた）は弔辞で、

園主（注＝信綱）は君（注＝百合子）が習字帖を書肆に出版せしむることに尽され、談漸く進みてその便をおくりつるは、あはれ君ははやう不起の臥床に在る日なりき。

「峰百合子ぬしを懐ふ」（「心の花」大正八年十月）（傍点佐佐木）

と言っている。傍点部分は出版費用は本屋が持ったように読める。悲しいかな、出版が本決まりになったという手紙を書いた時には、百合子は亡くなっていたのである。

信綱は「（『かなのしをり』の）中にいれむとてみせられし色紙と短冊」と書き、掲載作品は百合子が選び、信綱の了解を得ていたことを記している。

この本は刊行されたかどうか、不明である。現在のところ一書も見つけることができない。出版は白紙に戻されたのかもしれない。

3　楠緒子の遺稿集計画

百合子は「東京婦人の化粧」のなかで「大塚楠緒子さんのは何に出てゐるのでも探し出してよみます」と楠緒子の追っかけのような発言をしている。

楠緒子は明治四十三年十一月九日に亡くなるが、間もなく楠緒子の遺稿集の出版計画が持ちあがった。結果的に出版は中止となるが、経緯をみると、発案者は夫の保治ではなく、楠緒子を慕う友人達だったようである。なかでも百合子が中心になって企画が進められたようだ。少なくとも保治の目には遺稿集計画の中心人物は百合子だと映っていた。

保治と女性たちとの間を仲介したのは信綱である。

明治四十三年十一月二十九日と思われる保治から信綱にあてた書簡。

竹柏園集第二編暫時借覧願度候
過日御話有之候楠緒遺稿整理ニつき尚御相談願度ことありいづれ明けて御暇の折拝趨御指図願度と存候

『近代文学館資料叢書　文学者の手紙1』

保治が『竹柏園集第二編』（明治三十五年五月刊）を借りたいというのは遺稿整理のためであろうと『資料叢書』の注にある。楠緒子は「美文」（内容は小説）六編を寄せている。

「過日御話有之候」という表現から遺稿集の発案者は保治ではなく、信綱のように読める。そこで、遺稿整理の方法について〈尚〉相談したいので、〈明けて〉年が改まって、直接対面して指図願いたい、と言っているのだろう。亡くなって間もない時期だから保治の考えがまとまらないのも無理ではない。